

プレス空知 「旅するピアニスト」 深井尚子 2019年12月22日

令和元年も残すところわずかになりました。今年は、海外には行きませんでした。東京で演奏会が2回あり、やはり、旅するピアニストとなりました。

さて、私はベートーヴェンのピアノソナタのCDを2枚録音していますが、1枚目の録音は、ポーランドのカトヴィツェという町で行いました。ユニバーサルという大手レーベルからの発売だったのですが、ポーランド人の優秀な録音技術者がいることと、渡航費を考へても日本で録音するより費用がかからないという理由によるものでした。ポーランドはショパンの国ということと親日家が多いことで有名ですが、ベートーヴェンを専門とする私個人は、ポーランドは初めての土地でした。ポーランド語は、全くわからないのですが、技術者は英語とドイツ語ができましたので、録音は問題なく行われました。その時の録音の環境は素晴らしいもので、ポーランド国立放送交響楽団の本拠地になっている大きなホールを夜7時から借りることができ、スタインウェイのフルコンサートグランドピアノで、思う存分、録音ができました。その上、調律師がつきっきりで、少しの音の狂いも即座に調律してくれるという、日本では考えられないような夢のような環境が手配されていました。演奏会とは異なり、録音ですので、自分の満足のいくまで何度も演奏を繰り返しました。3日間、夜7時から深夜1時まで、ピアノの中でも最も大きい楽器で演奏しましたら、なんと背筋が筋肉痛になりました。ピアニストは、演奏の際、腹筋と背筋の緊張と緩和を繰り返して、毎日の練習や2時間程度の演奏会本番では、筋肉痛にはなりません。この時は、録音が終わった時、背中が痛くなり自分でも驚きました。

カトヴィツェは、ポーランドでも南に位置シクラフなどの古都にも近い、人口30万人ほどの中都市で、英語が通じるかと思いましたが、なんと、ほとんどポーランド語しか通じず、マクドナルドでハンバーガー1つを買うのも一苦労しました。お金を払うときがとても困り、結局筆談となりました。ポーランド語で覚えた言葉は、「ジェンクイエン」で「ありがとう」という意味ですが、ポーランド語に堪能な日本人に教えていただいた覚え方は、「人食猿」=じんくいえん(笑) ということで、本当に役立ちました！カトヴィツェは、とても美しく、ポーランド語も耳にやさしく、私は、とても素敵な時間を過ごせました。